



小田原史談

第27号 談会
小田原史一丁目館
小田原市幸一丁目
発行所 小田原市幸一丁目
郷土文化館

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

年頭の辞

小田原史談会長

鈴木十郎

昭和三十九年の新春を迎え、謹んで御祝詞を申し上げます。

小田原史談会が結成されてから、はやくも九年、その間における会員各位の史蹟調査研究、文化財の保存その他の業績については、今更ら繰り返すまでもなく多大なものがあります。各位はそれぞれ本職の傍ら、何等の報酬を求めることなく、本会の事業に献身努力されるのは、全く郷土愛の精神に基くもので、私の感激措く能わざるところであります。

凡そ史談会の事業は、直接間接に、わが小田原市の発展につながる持たないものではありません。今や本市は十三万余の人口を有し、近代都市として、政治・経済・交通・文化・観光すべての面に急速に変転しつつあります。この時に当って、史談会の事業も、また市の事業と併行して、共に発展すべき使命があると思えます。その意味において史談会員各位は、深く現代を認識して、視野を広め、一層のご努力を切望してやみません。ここに希望に燃ゆる新春を迎え、各位のご健勝を祝し年頭の辞といたします。

富士山を詠める山部赤人の長歌

天地のわかれし時ゆ 神さびて高く尊き 駿河なる富士の高嶺を 天の原ふりさけ見れば わたる日のかけもかくるひ 照る月の光も見えず 白雲もいゆきはばかり 時しくそ雪はふりける 語りつき言ひつきゆかむ 富士の高嶺は

田子の浦ゆ打ちいでて見ればましろにぞ
ふじの高嶺に雪は降りける

元日や一系の天子不二の山

明治の俳人内藤鳴雪翁の句である。明治の聖代に生を享けた日本国民の誇りと喜びを堂々と謳いあげている。或は現代に即せぬという人があるかも知れぬが、悠々二千六百年の歴史を有し、今は民主主義の世となつても、国民は天皇によって象徴され、国土は富士山によって象徴される。大和民族のあらん限りこれは永久不易なものであらう。聖国のはじめ、領土・人民・主権の三要素が一体となつて日本は形成せられ、日本人は自然に親しみ、育まれて、上代日本人は自然を神として尊敬し、畏れ、これを祀つて自らの生活を高めた。国土を礼讃する文学の第一はこの山辺赤人の富士山を詠んだ歌であらう。「天地の別れし時ゆ」の昔から、神と共にあった山として讀え、その崇高雄大ななる景観を讀美して「語り絶ぎ言いつぎゆかん」と結んでいる。古来有名人の詠んだ幾多の詩歌も、この赤人の歌の右に出るものはない。

新春

てみつ 齊藤 茂吉
天の色頭ちくる朝のいとま
にてわれの心を静かならし
む 佐藤佐太郎
生くる日の足る日の光ねが
ふ世にほろほす光あらしむ
なゆめ 土屋 文明
ひむがしの日の出の茜消へ
ゆきてまたたくのまに元日
はなし 川田 順
元日や梅ほころびし三輪
久保田万太郎

万葉集恋愛歌と通い婚

内田 武雄

初春を迎え、古代の通い婚に附いてすしお自出たところを、書かせていただきます。

古代日本の結婚制度は、通い婚であったようだ。レブチャ語の、カは行、ヨフ「往復する」であるから、カ・ヨフはたしかに「通う」である。さてこの場合、夫は妻と同棲せずに、ずつと妻の家に通ったのから、あるいは子供ができてから、嫁入りしたのか、または嫁とりしたのかは、はっきりしない。しかし、東歌の恋愛歌は、すべて関東の農民の通い婚の歌であるのは、たしかである。

何よりも東歌は働く民衆の歌であった。こういう歌は奈良朝時代に、農民のなかの無名の詩人によってつくられて、ひろく関東地方で愛誦された民謡であった。古代日本人の恋愛感情が、じつに素朴に、じつにすなおにうたわれていて、今日のお私たちの胸にも響くものが多いた。まづ青年たちは日が暮れると、夕めしをいそいで食べて、そうとう遠い村の娘の所へ通った。

「富士のねの、いや遠長き、山路をも、妹がとへば、けによばず来ぬ」(巻十四)という歌がある。レブチャ語で、トフは「訪問する」ケニは「急いで」ヨ

バは「躊躇する」である。そうすると、この歌は「富士の裾野の非常に遠い山道でも、妻のところへ通うときは大いそぎで、ためらわずにやってくる」という意味になる。しかし遠い山道を通うのも、また通い婚の楽しみであったでしょう。「まかなし、さねに我はゆく鎌倉の、美奈瀬川に、潮みつなむか」(巻十四)という歌もある。レブチャ語ではマク・マカ、それからナム・シ・ナ・シは「欲する」とか「恋しくてたまらない」となっている。ナム、サネは「いそいで」である。ナムは否定の助動詞である。カは強めや懇願の助詞である。そうすると、この歌は「妻が恋しくて恋しくてたまらないので、おれはいそいで相手のところへ行く。どうか、鎌倉の美奈の瀬川に、潮が満たないでくれ」となってしまう。

この歌から想像すると、この青年は妻を渡って、向こう岸の河のところへ通ったらしいと思われ、通い婚といっても、男は毎晩通うのではなく、あいまあいまに通うのであるから、仕事が忙しいときとか、取入れの忙行けるものでなかった。言いかへると、この時代の結婚生活は同棲ではなくて、

一か月数回のあいびぎであったから「もつ島、あしからふね、あるきおほみ、目こそかるらめ、心はもへど」(巻十四)という妻の歌もあらわれてくる。

レブチャ語の「多」は「多」ガは数詞の百で、やはり「多い」ア・シ(たぐさ)「が(たぐさ)ラ(の)」(ラ)が「たぐさ」で足柄小船ではなく「たぐさの労働でなくてはならない。こういうふうにして「もつ島」という枕言葉もりっぱに正しき日本語を知らなかつたと言っている。船が歩く」と言わなかつただろう。毎日使っていた言葉は歌によんでいるはずである。そうすると、この歌は、たぐさの島のよう「たぐさの島」の島が山ほどあるので、心には思うておられるが、会うことがさまたげられて、じつにすきりする。

「足柄の、をてもこのもに、さすわなの、かなるましずみ、ころ我紐とく」(巻十四)というすばらしい歌もある。レブチャ語になおす「足柄のあちこちにさしてあるワナが、ちようど鳥やけだもの足にからみつよう、妻とわたしたはおたがいにからみ合つて紐をいた」となつてしまふまた「さぬらくは、たまのをばかり、恋ふらくは、富士の高嶺の、なるさはこの

と」(巻十四)国文学者の説によると、寝ていることは、たましいばかりであった、恋をするとは、富士の高嶺の鳴沢のよう知られてい」と言われている、レブチャ語のサマ・ラタは蛇である。タマは石や玉で、ヲは玉をつなぐ紐である。ラクは「欲する」や「恋う」になつている。このラクは「……したく思う」のタクにもなつている。

ハは「……する時は」である。ナルは精力や情熱である。そうすると、この歌は「蛇は長いだけでなく、恋する時は富士の高嶺の噴火口のように燃えるような精力を持つているぞ」となつてしまふ。この場合の蛇は男の性器で、陰茎は長いだけでなく、恋する時は火のように燃えるぞという意味で、たしかに古代日本人の思想であつたらう。初春を迎へた元日私は氏神様におまいりに行くとき先づ目に付いたのが、しめかざり(ごぼうじめ)これは蛇の男女がサカッテいる姿である。蛇はつがう時には二匹が縄のようにつがって、八時間から十時間つがっている。こんな性力の持ち主は又となんない。だから古代の人は子孫繁栄のために神様のしめかざりにしたこともよくわかる。又正面には大きな輪が二つづつさかっている。これが殿方の大事な金の玉である。元日祭の終つたあとで社殿において、こんな話をしたら、これはお目出た

いと一同大よるこび。初春を祝うてか、すずめも仲よく尾を振り立てて、のきでさえずつていた。(万葉集の謎 安田徳太郎著より)

足柄人西下の記

青木 重雄

その年、一月一日付と言ふ年賀状の様な日付で、東京から関西京都への転勤辞令をもらつたのが五年前である。私は、種々面倒をみてくれた亡き義兄の墓前に西下報告のため、出発を前に、久野の東泉院を訪れた。故人の実兄に伴はれて墓参した後、御本堂にて初めて親しく在職の岸達志郎にお目にかかり、聞かせるまゝに京都に赴任して山科に住む事になったこととお話すると、「それは絶好の機会だ、山科には醍醐寺もあり、宇治にも三井寺や石山寺にも近く、又、作家の志賀直哉先生も山科に居られた事があつて「山科の記憶」と言う短篇をもつて居られる」との話であつた。

大寒の最中で本堂の一角に對座すると、急に寒気がおしよせて来て、お茶の湯気がも凍るかと思はれる朝だったが、楽しい一刻を過ぎて翌朝、東京の先輩や飲み仲間、悪友に送られて家族共々、始発の指定急行にとび乗つたのだ。

張一の宮を過ぎてけるかに伊吹は大雪にけぶり、大垣から彦根への吹雪は、幾度か汽車が止る程だつた。昨日の昼さかり、思えば猫柳の芽がもうふくらんで、小田原郊外の早春の気配が、一時に胸にこみ上げて来たが、その冬の琵琶湖北部一帯の大雪も、幸い京都にも山科にも積つては居らず一安心したのであつた。山科に落ちついたある日旺の午の、山科、山鼻、竹の街道町に、志賀直哉先生の旧居跡があり、近くの文房屋の白髪の主人が、何でもその事について大変長たずねると、円満そうな老夫妻は、「世間には私共以外にも、まだそんな物好きがあるんですか」と言いつたので親切に語られては別懸となつた。

志賀直哉先生は大正十二年の関東大震災の後、京都に跡を山科に住み、その旧居跡はいまはかわり、ある土建屋さんの所有になつてゐるとの事で、あの辺に橋があつた筈で、これが作品の中にでて来る山科川で、今同好の士が集り記念碑を立てようとしているのですが——との話であつた。

凡俗の私は、志賀直哉先生の「山科の記憶」と言う作品を知らずに、東泉院の岸住職のお話に感動して、問題の地を探して来たのだから、そこで初めて東京で買つて来た「山科の記憶」と言う本をひっぱり出し

迎春漫筆

浅見 靈風

あけまして

おめでとうございます
貴賤貧富と喜怒哀楽を満
載した世間という車も、休
みなく希望と幸福の終点へ
向って廻転、甲辰というコ
ースへ入りました。

健康と仕合せで新春を迎
えられた会員の皆さんと共
に陣容を立て直して一途に
発展に努力される史談会中
核の先輩諸師に心から感謝
の意を表しつつ迎春のお寿
詞を申し上げます。

今年はどうな催しがある
か、どんな行事があるか、
史蹟探訪はどこに行けるか
？元旦の朝に浮んだ頬笑み
は此の美しい夢でした。と
ともに今年も会員がどれ位
ふやせるだろうか、と思う
時、浮んだ笑みが消えたの
も事実です。よりよき企
画と、より会員増加のため
奮起を致しましょう。

さて新しく迎えた年は一
きのえたつ一歳です。甲辰
とはどんな意味を持ってい
るのか。運命学研究者とし
ての見地から少しく書いて
見ましょう。

干支を取り上げるとは
回顧趣味であり、時代逆行
だと非難されるかも知れま
せん。事実戦後の政府は科
学一辺倒の先端学者の説を
容れて庶民百年の親しみ、

容れて庶民百年の親しみ、

暮らしたの夢の啓からすべて
の非学理的な文字を抹殺しよ
うとしたが、民衆の心の中
には依然として存在し、復
活の傾向さえ見えて来まし
た。出産祝、結婚日、結婚
日から葬祭日、井戸堀り、
家建て、門戸神仏壇等依然
として吉日吉方を喜ぶ風習
は踏襲されています。国民
の大黒柱として尊敬おかな
い我が皇室に於てさ大和
民族の国ぶのは取り行なわ
れております。

前おきはこの位にして、
辰(たつ)から入りましよ
う。十二支の五つ目に当り
表絵上空想の獣類である竜
即ち「リウウ」をとつたの
は仏教の影響であって、「辰
」が正しいのであって、「辰
」の原字は右上から左横に角
をまるく下へ書いてその曲
線の内側へ丸味をつけて貝
の形とします。右上左下と
も丸線は貝形から出してお
きます。その貝のあく方か
ら斜め右下へ二本出し中間
に一本終りに一本書いて止
める和恰度員が脚を出して
いる形とあります。これが
変化して現漢字の辰になりました。
「貝が足を出すさまの形
文字、勢いよく活動する
さま」とあります。これ
でもわかる様に辰は正に活
動期に突入する時期の意が

あります。勢冲天の辰歳に
世界オリンピックの世界的
祭典が我が日本へ来た事も
そのための事業の殺人的突
貫工事としての建築工業界
道路網土工業界の発展もむ
べなるかなです。そのよう
な意義を内包しているから
辰は旧暦では五月に当り、
新暦では四月五日午前三時
から五月五日午前九時まで
、生きとし生けるもの深羅
万象、心なき天地山海まで
冬眠から開きされて、ただ
訳もなく心気浮き立って動
かすには、遊ばずには働ら
かすには、いられない陽春に
あててはいます。年間最高の
季節となつてはいます。

五行でいうと来年の己は
陰ですが、辰は陽の土です
陽光さんさん草木葱々緑を
まじ、花は天地に満ちて鳥
は囀り蝶は舞って、天国に
優る地上楽園期であります
十二支の辰は別称では奮
に当ります。「奮」には、
鳥が田の上を勢いよく飛ん
でいる形象から出来た漢字
であるから、勢い強く飛び
上る、とか起ち上るの意が
あって、ここでも活動期を
充分に現わしていますし、
命理学でいう冠帯星に相当
し「冠帯」とは人間生涯の
運勢の強弱を調出する十二
運のことで、それを人の一
生に当てはめて胎育から墓
に入つて絶える迄を十二星
にして頭上五つで、齊戒沐浴
して頭上五つを戴き身は正
衣を帯びる時とし、次は立
太子式典の建祿となる、年
でいへば十四五歳時を表し
ている。これ亦絶大の青年
初代活動突進期となります
方位で見ても正東が卯で
南へ三〇度廻った処が辰、
次の三〇度が己でこの間が
易学でいう巽(たつみ)に
該当し、家飲の入口門戸、
該当し、家飲の水、井戸の
生活の中心飲用水、井戸の
吉方であります。

この辰を最も身近かな時
刻にすれば午前七時から九
時までの一刻、つまり二時
間、今日の計画もすつた時
り出来て身心爽快、元氣横
溢、天馬空をつつ走るの既
で仕事に取りかかった時間
であります。良いづくめで
嬉しいづくめ、楽しいづく
めが「辰」であります。
それでは今年は何々の差
別なく、何をしても志望成
就計画成功奏効無比でしょ
うか？
皆さん！待って下さい！
十二支の辰は全く書いた
通りです。が、天干が甲一
きのえに組み合わされ、
甲は陽の木ですから、地星
陽土の辰の上に天星陽木の
甲が天をも覆うばかりに茂
っています。日の当らない
土に思つた程の力があり
ません。これが今年に科せ
られた経済界の疑問となる
と同時に、人には生年月日
から天与の命運が否応なく
負わされていきます。辰年は
個々の人々に果して吉か凶
か？
お天さまは笑顔で下界
を見おろしています。PA
はやめて迎春漫筆を折しま
しょう。

文苑

懐亡友

斐田 天峰

郷学推君為白眉。
誰期遺墨別離悲。
寒燈流燭感懷淚。
髣髴如談在旧姿。

訂正・前号歳晚所感(若杉
一所氏作)起句処々は、
々の誤植。又二三号函讀
重遊似旧盟(斐田天峰作
)転句與は与、採は堀、
第二詩承句の「部」は「
余」の誤植に付訂正。

初冬 縁

佐藤 春子

いたづきのいえて小春の縁
先に干したる夜具の綿のふ
くらみ
背にぬき小春の陽さし心
地よし縁にひろげて衣つく
らふ
筑紫 汀
初冬の陽のさす縁に若妻の
障子張り替ふ日かげ惜しみ
て
佐藤 春子
波柿の皮をむきある日だま
りの縁あたたかし小猫ねむ
れり
安藤 花子
小春日の縁に障りてもの縫
へば心あたまりうた心湧
く
小泉 晴子
庭下 駄
片寄せし庭下駄さみし長病

雑詠の内

平原 勝郎

東京はスモッグの季かわが
郷の美しき海と松を先づ云
ふ
白菜の安くなりしことなど
妻語るに日さしあたたかに今
日冬に入る
違反容疑日々にひろがる部
落にて一人気まづき思ひし
てをり(国会議員選挙)

雑詠の内

清水専吉郎

若竹は軒凌ぎ立ち大空をと
もに仰かむ辰歳の春
片寄せてはかむ主なき庭下
駄におもひはふききざりし
日の夫
佐藤 春子
昭和三十九年甲辰新年

豆相史談会

開催

本年の豆相史談会は伊豆史談会当番にて、伊豆において左記のとおり開催することになり、当史談会よりも多数参加を希望しています。詳しいことは郷土文化館にお問合せ下さい。

日時 一月二十五日(土)
午後三時集合。

会場 蕪山温泉 真珠院
会費 金壹千円(外に豆相史談会費百円)

(会費壹千円は宿泊料と夕食、朝食、入浴料を含む)
講演 北条早雲について
史跡 一月二十六日(日)午前九時より蕪山附近の史跡めぐり(貸切バス)

編集後記

▲謹んで新年のおよろこびを申上げるとともに、本年も相変わらず皆様のお元気で多幸のほどを御祈り申し上げます。

▲一年毎に明治は遠ざかってゆく。明治は遠くなりにけりと謳った歌人もありませんがその明治も元年以来、九十七年、大正以来は五十

三年の歳月を経ています。従って五十三才以上の人は何れも明治っ児で、これらの人々が未だ世の中で活動しています。試みに政界の方面を見ても、いまを時めく池田総理をはじめ、実力者といわれる方々は何れも明治っ児で、それを思うと明治は未だ遠い昔でなく、明治生れを骨董視するにはなお早いといわねばなりません。

▼もともと明治四十五年から三期に分けて十五年までを初期、三十年までを中期、それ以上を末期と区分してみると、初期は八十才以上で、片脚は棺桶に突込んでおる人々で、明治十三年生れの筆者の如きもその一人で骨董品扱いされても不服は云えませぬ。

▼とはいふものの明治時代はど花やかな時代はなく王政復古の大業から、世界に飛躍するまでの日本歴史上に特筆大書すべき発展ぶり、東海の一孤島人口三千万の小日本が、めきめきと背のびして、人口一億を越え、日清・日露の戦争に大勝利を収めて、版図は大陸から台湾・樺太まで延び文字通りの大日本帝国を築

きあげて、世界三大強国の一とまで推されるに到りました。

▼この全盛期において、明治初期に生れたもののほど、時代の寵児としてあこがれを持ち郷愁を覚ゆるのも無理はありません。総てのものが深い印象として残っており、何彼につけてそれが思い出されます。今後日本は民主国家となつて何処に行く。時代は刻々に移つて大正・昭和生れの人々によって再び輝しい日本が出現する日が来るのは何時でしょうか。

▼といつて、なにも往時の封建的軍国主義を夢見ているのではありませぬ。今日の時勢は曲んだ方面に進んで、期待した民主国家とは程遠いものがあります。これが本當の姿に立戻り、国民挙つて民主主義を謳歌するのはいつの日でしょうか。われわれ明治初期の人々は、それを見届けて人間終着駅に入りたいと思うのは、誰でも年頭に湧く実感ではないでしょうか。いやとんだ老人の愚痴話、これも屠蘇の言わしむるところとお許しを願います。

(M)

<p>御料理 仕出し 御弁当</p> <p>株式会社 東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>楽しい生活 明るい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p>船 志澤</p> <p>TEL 3131</p>
--	---	---------------------------------

<p>セトモノの御用は (陶磁器・陶管・植木鉢)</p> <p>有限会社 大川商店</p> <p>TEL 8513・3055</p>	<p>浄化槽の清掃修理</p> <p>小田原市録1の47</p> <p>小田原衛生株株式会社</p> <p>電話 5861・2468番</p> <p>取締役社長 鈴木浩</p>	<p>電気工事一式・設計・請負 販売修理</p> <p>兵藤電気商会</p> <p>小田原市下曾我駅前 電話 国府津(4) 3578番</p>
--	--	---

<p>各種竹製品製造卸 干梅 発売元</p> <p>中島観光物産商会</p> <p>小田原市幸3~485 TEL 5019</p>	<p>日本銘菓指定店 神奈川県指店銘菓店</p> <p>山口菓子舗</p> <p>井細田店 小田原駅前店 TEL 2215 箱根湯本店 // 5641</p>	<p>報徳証券株式会社</p> <p>小田原市幸1~162</p> <p>電話 6128(代) 7537</p> <p>利殖の早途は証券投資から 安全確実な利殖投資</p>
---	---	--